

プロレスラーおよび格闘家のセカンドキャリアサポートについての考察

スポーツクラブマネジメントコース

5009A330-1 村田 知隆

研究指導教員： 間野 義之 教授

1. 緒言

我が国は、高齢化や少子化、価値観の多様化、社会構造の変化などから、スポーツの競技人口は今後減少すると予測されている。各種のスポーツ競技団体には、競技を継続させ永続的に発展するために時代に適応した施策がこれまで以上に求められている。

プロスポーツ選手にとり引退後の生活に不安があることは、選手自身のみならず、競技参加者にとってもネガティブな要素となり、競技の継続・発展を妨げる可能性がある。今後、引退後の生活が担保される環境づくりは、プロスポーツ競技団体にとってますます重要になると考えられる。

Jリーグは他競技に先がけ 2002 年、NPB も 2007 年にはセカンドキャリアサポートを組成した。日本相撲協会や日本ボクシングコミッションなどで、キャリアサポートへの取り組みに関する報道が 2007 年頃から相次いでなされている。

筆者が携わった経験があるプロレスと格闘技の両業界においても、プロレスラー・プロ格闘家の引退後の社会生活へ向けた施策、即ちセカンドキャリアサポートについて検討することが必要であると考えた。

2. 先行研究・評論のレビュー

先行研究においては、プティパ(2005)のほか、海外のセカンドキャリア支援策の事例調査(吉田他, 2007)からなど多くの研究において、引退に直面した際の就職支援策としてのキャリアサポートだけではなく、現役選手としての活動期間中から引退後を意識することが必要であるとし、また一貫してキャリアサポートの重要性が指摘されている。

3. 研究目的

本研究の目的は、プロレスラーおよび格闘家のセカンドキャリアに関し、各競技の選手が引退後にどのような就業形態を望んでいるのかを明らかにし、またコンピテンシー(高業績達成能力)と、現役選手の自己評価から導かれる結果との相関性や因子の構成を分

析し、プロレスラーおよび格闘家の現役選手生活のあり方を考察することである。また、プロレス界・格闘技界ともに競技を統括する団体や協会、機構等は現存していない。団体の運営方針や設立の経緯などは様々であり、本研究では、業界の在り方について安易に考察や提言を行わない。

4. 研究方法

研究に際し、研究対象の定義は以下とした。

プロレスには様々なスタイルがあるが、包括してプロレスとした。格闘技は、総合格闘技・立ち技格闘技と呼称される競技を対象とした。

表 1 の条件全てに該当する者を研究対象とした。

表1 本研究における研究対象の定義

- ・プロレスと格闘技のいずれかもしくは双方の試合に対価を得て出場している選手
- ・男性選手
- ・現役選手
- ・日本国内に生活の拠点を置く選手

調査方法は質問紙によるアンケート調査とし、2009 年 9 月から 12 月にかけて実施した。

分析方法は、各コンピテンシーに対応した設問からコンピテンシー毎に作成した合成変数からクラスタ分析を行ったのち、カイ二乗検定および一元配置分散分析を行った。

統計解析ソフトには SPSS Statistics 17.0 を使用した。

本研究の仮説として、キャリアの移行に対応できる可能性が高い選手、即ちコンピテンシーの高い選手は、現役時代から引退後の人生への意識、引退後の生活設計を描いているとの設問への回答に高い数値を示すという仮説を設定した。

5. 選手に対するアンケート調査結果・分析

アンケート有効回答者の属性は以下となった。

表2 アンケート調査 回答者

	年齢		キャリア		婚姻状況		収入内訳	
	Mean	SD	Mean	SD	未婚者	既婚者	選手専業	副業あり
プロレスラー (n=105)	29.9歳	6.29	7年9ヵ月	67.06	74.0%	26.0%	50.5%	49.5%
格闘家 (n=110)	28.2歳	5.37	4年11ヵ月	51.71	79.1%	20.9%	25.0%	75.0%

プロレスラー・格闘家ともに、3つのクラスタに分類したところ、プロレスラー・格闘家ともに、コンピテンシーを構成する6群が全体的に高い・中間・低い3つのクラスタに分類され、平均値は以下となった。

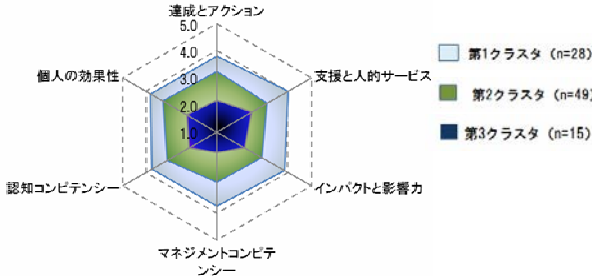


図1 プロレスラー・各クラスタのレーダーチャート

図1の各クラスタの平均値は下の表3である。

表3 プロレスラー・クラスタ毎のコンピテンシー平均値

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3
達成とアクション	3.81	3.24	2.16
支援と人的サービス	4.01	3.13	2.47
インパクトと影響力	3.86	2.91	2.17
マネジメントコンピテンシー	3.74	2.87	1.75
認知コンピテンシー	3.75	3.12	2.18
個人の効果性	3.81	3.30	2.27

また、引退後の人生への意識についての設問、引退後の生活設計を具体的に描いているかという設問には表4のとおり有意差が認められ、仮説は証明された。

表4 プロレスラー・各クラスタの特性 5段階自己診断回答平均値

	クラスタ1 (n=28)	クラスタ2 (n=49)	クラスタ3 (n=15)	検定	多重比較
引退後の人生を意識している	3.82 (SD:1.06)	3.53 (SD:1.19)	2.73 (SD:1.39)	F=4.173*	1>3
引退後の生活設計を具体的に描いている	3.39 (SD:1.17)	3.04 (SD:1.04)	2.33 (SD:1.40)	F=4.212*	1>3

*P<.05

以下は、格闘家のクラスタ分析の結果である。

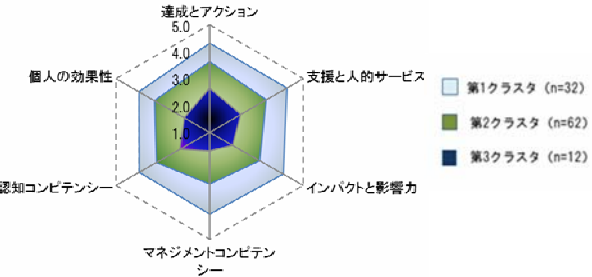


図2 格闘家・各クラスタのレーダーチャート

図2の各クラスタの平均値は下の表5である。

表5 格闘家・クラスタ毎のコンピテンシー平均値

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3
達成とアクション	4.32	3.63	2.65
支援と人的サービス	4.30	3.42	2.33
インパクトと影響力	4.14	3.14	1.97
マネジメントコンピテンシー	4.07	2.94	1.69
認知コンピテンシー	4.01	3.28	2.26
個人の効果性	4.02	3.36	2.08

また、引退後の人生の意識についての設問、引退後の生活設計を具体的に描いているかという設問には表6のとおり有意差が認められ、仮説は証明された。

表6 格闘家・各クラスタの特性 5段階自己診断回答平均値

	クラスタ1 (n=32)	クラスタ2 (n=62)	クラスタ3 (n=12)	検定	多重比較
引退後の人生を意識している	4.09 (SD:1.23)	3.52 (SD:1.14)	3.08 (SD:1.51)	F=3.837*	1>3
引退後の生活設計を具体的に描いている	3.78 (SD:0.94)	3.18 (SD:0.97)	2.58 (SD:1.24)	F=7.266**	1>2, 1>3

**P<.01,*P<.05

6. 考察

プロレスラーおよび格闘家双方が、クラスタ1の選手像を志向した選手生活が望まれると考察した。

7. 業界内インタビュー調査

現在都内で飲食店を経営する元プロレスラーへのインタビュー調査を半構造化法により実施した。

回答の要約は、プロレスラーにはそのままの状態では社会に適合できない選手が数多くいるだろうということと、年齢が高くなるほど、キャリアチェンジの困難度が増すだろうということであった。現役生活において最も重要なことは、社会性を持ち、ひとりの社会人として世間に通用するような生活態度を心がけ生活することであるという意見であった。

8. 結論

クラスタ分析による仮説の証明、また、第7章にてインタビュー対象者が現役時代に最も重要なこととした社会性を持った生活を行うという言葉からも、プロレスラー・格闘家ともに現役時代から引退後を意識し、引退後の生活設計を描くことが引退に直面した際に適応がなされ、引退後へ良い影響がもたらされる可能性が高まることが明らかとなった。この結果は、プロレス・格闘技双方の選手にとっての現役生活の過ごし方・姿勢や選手を率いる団体や指導者にとって意識すべき選手の指導・育成方針を示唆している。

9. 提言

引退に向け、個人単位でも、何らかの現役引退後を意識した準備策をとるべきである。その内容を充実させ、少しでもそのような活動を行う選手が増加することが、選手自身の可能性を増大させることはもちろんのこと、業界の発展に寄与すると考えられるからだ。